

近江 狛坂寺址磨崖佛について

特に朝鮮渡来人と関連して

李 廷冕

1 序にかえて

近江國は、古代朝鮮系移民^{〔1〕}と、深い関係を持つ、琵琶湖の、東南北を問わず昔から、渡来文化が、重層している所である。それを、物語るが如く、石造物、特に、石塔寺（滋賀県蒲生郡石塔町）にある三重の石塔と狛坂寺址にある磨崖佛（滋賀県栗太郡栗東町荒張）は、古代朝鮮とのゆかり深さを偲ばせる。筆者は、日頃、この二つの、石造物について深い関心を持っていた。その中の一つである三重の石塔については、既に、簡単にまとめて見た。けれど、狛坂寺址にある磨崖佛に関しては、なかなかそれに近づく機会に恵まれなかった。ところが一九八九年一月、北九州と瀬戸内海沿岸に所在する、神籠石系、山城調査の為、現地を訪れた。そのついでに、資料集めの為、京都に立ち寄った時、幸い京都大学の足利健亮教授の案内で宿願の近江金勝山（標高五六七㍎）狛坂寺址にある磨崖佛を調査することが出来た。加えて、一九八八年から一九八九年までの一年間及び一九九〇年の夏、韓国調査中に、あちこちと山城を踏査した。この機会を利用して、瑞山地方の磨崖佛と、慶州南山の磨崖佛などを尋ねることが出来たのは、狛坂寺址磨崖佛について書き上げるのにまたとないよき機会でもあった。

狛坂寺磨崖佛は、日本の石佛史上その規模、製作年代の古さ、造形的表現の優雅さなど、すべての面において卓越した石佛であり、日本でも國の史跡に指定されている（一九四四）。特に最近この狛坂寺磨崖佛は、古代の日本と朝鮮との交流を具体的に物語る遺品として、新たな注目を浴びている。

ここに書くとする、狛坂寺磨崖佛は筆者が日頃図書館で集めた文献、資料を韓国と日本の現地を歩いて集めたfield dataを元にしてまとめたものである。韓国、そして日本でこの道の大家先学が既に、筆にしたものであるが、それを踏まえて忠南瑞山郡の泰安（白樺山）、雲山（伽耶山）、慶州（南山）と、そして近江國、金勝山、狛坂寺址の磨崖佛が、古代朝鮮渡来人と、どのような関係があったかを調べて見たかったのである。

筆者が、渡来人のことについて関心を持ち、文献資料を集め、そして現地を踏んで既に、八年近くになる。そ

れは大膽な理論、いわゆる新しい視点から新たな理論を展開する為のものでもなく、既に常識化されたもの、或いは定説化したものを、読み直し、現地をふみつつ、筆者なりに疑問を抱いた点を新たな角度から透視してみようとするに外ならない。いわば、日本において「見えにくい、朝鮮文化」を照射することである。古代、朝鮮からの渡来人の姿がはつきり浮彫されない限り、本当の日本の古代史は決して明らかにはならないと思う。

その間、粗雑ながら、鉄づくり、神社、山城、漢氏、秦氏らの活躍など、いくつかをまとめてみた。今回は近江の狛坂寺址磨崖佛^②に焦点をあててみた。

2 近江と朝鮮渡来人

日本歴史上、近江の存在は重要な意義を持っている。特にその位置は、古代大和政府の所在地に接近し、琵琶湖を抱えていることで、日本文化の上でも重要な役割を果たしていた。同時に、近江は中央政府の所在地たる大和、山城よりも摂津、河内、紀伊と同じく、近江は比較的ほかの地域に見られない特色のある文化を残している。まさに、藤原武智麻呂伝の近江國に対する國ほめの詞章（ことば）の通り近江は京都、北陸、東山そして東海とをつなぐ要地でもあった^③。

特に北陸、山城、大和地方とは従来において古くから、琵琶湖が利用され、古代朝鮮の影響を受けた越前若狭地方また敦賀を中心としたあたりの地方は、古代において特別に発達した文明があった。その文明が大和に入りまた大和の文明が北陸に伝えられる経路は琵琶湖であり近江であった。近江は北の北陸と南の大和両文明の媒介者であり、接合地帯でもあったわけである。ここに言う、北の北陸文明とは外来文化であり、それはとりも直さず朝鮮文明であった。そのようなことは敦賀の気比神社、伊香郡、余呉湖の羽衣伝説、或いは湖畔の神羅崎神社など、朝鮮系渡来人の足跡を物語っている。

古事記や日本書紀などは明らかに天日槍の渡来について記録している。瀬戸内海のルートで渡来した天日槍は、宇治川を遡って近江國に入り吾名邑（アナムラ）に暫く住んだが、更に北に進み若狭に入り西に折れて但馬におもむいたと書かれている。近江の鏡村に住んだ陶人（すえひと）は天日槍の従者の後裔であると言う。但馬に至る間天日槍集団は、彼等が所有していた優れた技術を近江に残した。天日槍に象徴される渡来集団の近江入りにならむ古社も滋賀県にはかなり多い。草津市穴村町の安羅神社や、龍王町の鏡神社はその例である^④。

延喜式神名帳^⑤によれば、近江國一五五座の神社の中、渡来人と関係を持つ神社と考えられるものが、兵主神社（野州）、兵主神社（伊香）、阿自岐神社（犬上）、目撫神社（坂田）、日署神社、鞆結神社（高島）、麻知神社（高島）などがある。また渡来人が、中心となったと思われるものに御上神社、比利多神社、己爾神社（野洲）、比都仕神社（蒲生）、乎加神社（野洲）、波久奴神社、比伎多理神社、上許曾神社、麻蘇多神社（浅井）、鉛練日比神

社、意富布良神社、與志漏神社（伊香）、與呂岐神社、麻知神社（高島）などがある。⁶ 延喜式神名帳によれば、式内社の分布は大和、伊勢、出雲そして近江の順序であった。⁷

一方寺刹の方を調べてみれば、愛知郡の百済寺は聖德太子の時、太子の師であり渡来人であった恵聡以下の朝鮮半島からの渡来僧が建立したものである。⁸ 蒲生郡石塔町の石塔寺にある三重の石塔も百済人によって、建てられた代表的な百済様式の石塔である。⁹ 八日市市内にある狛の長者の氏寺である高麗寺は狛の長者伝説と共に渡来集団にちなんだ寺であった。狛の長者は北近江地方の豪族として有名な渡来人集団であった。そして彼等の子孫は永らくこの地で勢力のある豪族として栄えた。¹⁰

萬葉歌人として有名な山上憶良は琵琶湖の外れ、現在の滋賀県甲賀郡水口町（みずぐち）あたりの甲賀に住んでいた渡来人であった。湖東、湖南、湖西と連なる百済渡来氏族の帯状にのびていた居住地の中間地点に近い山よりの土地が甲賀である。難波から上陸すれば、淀、宇治、瀬田を経たコースで甲賀に至る。

日本書紀の天智天皇、八年の是歳の条には余自信、鬼室集斯ら、百済の男女七〇〇餘人を近江の蒲生郡に移したと伝えている。これらの百済人が蒲生野を開墾したことは記録に明示されている。また近江朝廷の有力な官人が百済出身の人々で占められていたと言うことを、日本書紀、懷風藻などに書かれている。前にあげた人材の外に沙宅紹明、谷那晋首、憶礼答怵春初などがあげられる。答怵春初は長門の城を築き憶礼福留と憶礼四比福夫は、筑紫に大野城、基肆城を築いた。また鬼室集斯は近江朝廷の学頭職人になり、彼を祀った鬼室神社が今も日野町にある。蒲生野周辺は、少なくとも三世紀頃から朝鮮渡来の氏族が多く住んでいた所である。

近江京のあった志賀郡についてみれば、近江朝をつくり支えた百済系渡来人の集団地であり、蒲生、神崎、愛知、甲賀などに大きく根を張っていた。また多くの渡来人氏族の勢力圏でもあった。このように近江朝廷には百済からの渡来人が、予想以上に多く近江朝の政治、経済分野で仕えたばかりでなく、また近江朝の漢文学などの文化面を興隆させたのも渡来系の文人たちであった。

渡来氏族の分布を辿れば、近江の各地に廣がるが、大津市とその周辺は、文字通り渡来人の里であると言われる様に、多くの渡来系の人々が住んでいた。滋賀郡の大友郷は、渡来系の大友氏の本貫であった。その周囲には百済、伽耶系の志賀氏や穴太村主（あのうすくり）らが住んでいた。そして大友郷あたりに住んでいたのが、三津首（みつのおびと）と呼ばれる氏族であった。日本天台宗の開祖と崇められる最澄（七六七―八二二）も、百済系渡来人にかかわりがあった。彼は滋賀郡古市郷、現在の大津市の膳所から石山の間で生まれた。滋賀郡の錦織部（にしごり）もその名の通り、錦部らの居住地であり、近江の錦部村主の本貫であった。

大津市の穴太廢寺は、穴太村主らとも関聯する寺址として、推定される。その近くの住居跡群には、朝鮮式の温突の形式を保有していたものが今もあって、朝鮮半島との絡みを色濃く示していると言う。また、大津市の堅

田衣川町の廃寺から百済系渡来氏族との関聯を想はせる瓦が出土していることは、近江と渡来人の関係を見る上でみのがせない事実である。

そのほか、地名からみても近江における渡来人の足跡は明らかにされる。¹¹⁾野洲郡の兵主村、神崎郡の高麗寺村、浅井郡の唐國村、坂田郡の久禮村等は渡来人との関係をしめす村である。土器村、駕輿丁村、下野村、木部江部等の名も何か渡来人との掛かり合いを偲ばせるものがある。特に蒲生郡八幡町の比々禮、八幡の寺礼という言葉は、朝鮮語のフレ(觸)、フル(村の意)であり、高島にある安曇川は安曇連と言われた一族の勢力圏にあったのである。これらの地名、村名などは、近江と朝鮮渡来人との関係を調べる上においてゆるがせに出来ない点である。¹²⁾

ついでながらフレ(觸)なる地名は古代朝鮮渡来人の殆どが、日本本島への途中立ち寄ったと言う長崎県の壹岐にはフレのつく地名が九十九もあると言う。東觸、西觸、南觸、北觸、中觸、庄觸、木村觸などはそのよき例である。鏡味は朝鮮系の出雲族が大和を占據してフル(布爾)の地名を残した。フレ、フリと言う語は地名として移植されながら、ついに日本語化するに至らなかった外来語でフル、フリも同じく朝鮮語で、村落を意味すると言っている。¹³⁾

近江と朝鮮渡来人との関係は天智天皇による大津遷都以後に始めて朝鮮文化が流入したのではなかったことは既に述べた。その以前から近江は渡来集団の開拓地であった。近江朝の政治経済文化の繁栄を支えたのは、渡来人の精力であり、それはとりも直さず百済系、新来の渡来人の力に負う所が大きかった。朝鮮系、渡来人集団は殖産興業に優れ、高度な土地開拓の技術を持っていた。こうした技術を背景に狭い土地にも拘らず、巨大な経済力を生み出し、七世紀中葉にはすでに勢力を持っていたと見られる。大津京もこうした経済的背景があつてこそ多くの反対を押しのけて断行したと考えられる。天智天皇は遷都に必要な高度な土木技術や、経済的基盤を朝鮮系渡来集団に求めていたと見ている。¹⁴⁾

近江の中の朝鮮文化の光彩はあちこちに留まり、そして渡来文化は風媒花ではなかった。その背景には近江在来の人々と渡来集団との密接な往来があり交渉があつた近江の古代史にはわれわれの予想する以上に朝鮮との関係を物語る遺跡や伝承が多い。¹⁵⁾近代近江の光と影に朝鮮半島からの渡来集団が大きな役割を荷なっていたことを近江の古代史ははっきりと語り伝えている。その近江國栗太郡栗東町荒張にある金勝山、そこから西に折れて二キハの所にある狛坂寺址磨崖佛は古代近江に定着した朝鮮系渡来集団とは切り離せない関係があるものと思う。

3 金勝寺・狛坂寺の創立と磨崖佛の歴史的背景

金勝寺と狛坂寺の創立

金勝山狛坂寺址の磨崖佛は高さ六米、幅三・六米の花崗岩の中央に中尊、そしてその両側に両脇侍の立像が彫られ、更にその上に小さな三尊佛二組と三体の菩薩立像が刻まれている。この磨崖佛を語る前に磨崖佛の地に開かれた金勝寺と狛坂寺創立とそれに絡む磨崖佛の歴史的背景についてふれて見たい。

金勝寺の伽藍を造営したのは九世紀始めの弘仁年間興福寺の僧、願安であった。けれど、彼に先立ってこの金勝寺は金肅菩薩によって、既に開かれたとも言う。そして金勝寺の寺号も金肅菩薩にちなむ名称であったと言われる。また狛坂寺は弘仁七年（八一六）僧、願安によって、金勝寺の別院として狛坂の地に創立された⁽¹⁶⁾。

田上山、金勝山の一帯が藤原・平城京の造営や東大寺建立などにおける膨大な建築用材の供給地であったことはよく知られている。けれどそう言った活動が始まる以前から或いは少なくともそれと同時に金勝山は西南、田上山に連続し、鉾物、宝石類の産地であり、土地の人々は金勝（こんぜ）または金青（こんしょう）とも呼んでいた。金勝と言う地名はこのあたりに青銅を採掘したり細工する金勝族と呼ばれた一族が住んでいたのに由来すると言う説がある。金勝族と言うのは、渡来氏族集団であったと思う。金勝寺或いは狛坂寺の創建にかかり、磨崖佛や其の他の石像石佛など造立したのも渡来氏族であると言える⁽¹⁷⁾。

続日本後紀⁽¹⁸⁾によれば、金勝寺は天平五年（七三三）に聖武天皇の頼願によって良弁が創立した寺とも言われる。良弁は大津市、石山寺を開いた高僧でもある。金勝寺は、東大寺の造営に際し木材を切り出した時、山の神を鎮める為に建てられたとも言われる。または紫香樂宮の鬼門鎮護の為に建てられたとも言われる。菅原道真も勅命によって参籠したと金勝寺寺縁が伝えられている。その後、僧、願安によって再興され、天長十年（八三三）には預定額寺に列せられるなど、長い間名利として信賴を集めていた⁽¹⁹⁾。

良弁の出自については相模または近江の両説があるが、近江説の方が正しいようである。彼の俗姓は漆部氏、百濟氏とも言われるが近江國、滋賀郡（滋賀県大津市）本貫の百濟氏の出身であり、百濟系の渡来氏族の後裔であった。良弁は石山寺の開基などで知られ聡明さと徳高によって有名であった⁽²⁰⁾。

良弁は、聖徳天皇の崇敬を受け聖武建立の金鐘寺の住持に迎えられた後、東大寺初代の別當になり、東大寺建立の四聖と言われた。大佛鑄造にも大きく貢献をなし、大僧正、僧正にもなった。ところが、東大寺要録の根本僧正侍には金勝寺創立に関係する良弁と金鷲菩薩と同一人物と見ている、一方、吉田も金勝、金肅、金熟は僧、良弁の一名であり、金勝山に金勝寺を創立した英傑だと記録している⁽²¹⁾。

狛坂寺の創立については、大永六年（一一五六）青蓮院尊道親王によって書かれた狛坂寺縁起は次のように傳えている。即ち、蒲生野に住む狛、長者の持佛であった金銅、千手観音像を長者の女が嵯峨天皇の皇妃檀林皇后に献じた。その皇后がそれを願安に下賜したと言う。これを受けた願安は、始めは金勝寺に安置しようとしたが、金勝寺は良弁、願安、両僧の結界の靈地で女人の参拝を許さなかった為に、狛坂の地に別院として建立し、本尊

としていた。かくして信仰も高まって行ったようである⁽²²⁾。

一方狛坂寺が金勝寺の末寺として既に平安時代に存在していたことを、金勝寺所蔵の、狛坂勝示繪圖に記録されている。この繪圖には狛坂寺伽藍が金勝寺西方の山中にあることを示し、同時に狛坂寺の位置を明らかに示している⁽²³⁾。

狛坂寺は文保二年（一三一八）八月二十日に、本堂が焼け、直ちに再興されたが、永正十二年（一五一五）八月二十日に本堂がまた焼かれた。その後、しばらく廃寺となっていたが、天保十年（一八三九）七月に本堂や住僧の居室などが立てられ、門前には十軒餘りの人家を並べていた。しかし、後の廃佛毀釋令によって、堂宇の姿は既になく、今は僅かに石積み基壇と、瓦の破片が昔を偲ばしている⁽²⁴⁾。

金勝寺狛坂寺のある金勝山の地理的環境は、花崗岩の奇岩怪石で特色づけられている。即ち、金勝山全体が花崗岩の巨岩からなり、至る所で絶壁断崖などをなして、花崗岩独特の荒地性の表面が濃い緑色で、松の木、雑木などがその合間に茂っている。

八世紀に入り山林修行思想が出て来るにつれて、石佛は、やや人里離れた静寂な地を選ぶやうになった故に、狛坂寺址磨崖佛も登るに容易でない山頂近くにあるのは、平安初期の山岳佛教と結びつける見解もある⁽²⁵⁾。

ともあれ、狛坂寺磨崖佛の造立の後二百年間、石佛の遺品はなく、飛鳥、白鳳以来の優れた石彫技術の伝統を伝えていたのが、狛坂寺址磨崖佛であった。

百濟佛教の伝来と瑞山の磨崖佛

話が良弁に絡む金勝寺、狛坂寺そして磨崖佛になれば、素通り出来ないのが百濟の佛教であり、瑞山郡泰安、雲山の磨崖佛であろう。

朝鮮の三國時代中国から最初に佛教が入ったのは高句麗（三七二）であった。百濟は枕流王元九月に胡僧の摩羅難陀が晋（中国の東晋）からやって来ることによって、佛教が伝わった（三八四）。百濟と中国南朝を連絡するルートは海上交通によっていた。百濟に江南の佛教が入る昔の建康、今で言う長江（揚子江）流域の佛教が入って来た朝鮮半島の西海岸から黄海に突き出た泰安半島（忠南）に瑞山、唐津がある。百濟は、これらの地域を中心として中国南朝と往来していた。かくして瑞山泰安には七世紀初期の造立と見られる磨崖佛があり、そこは佛教伝来の要所でもあった。

従来、三國時代の佛教伝来をただ中国南北朝時代と結合しただけに終り、その中百濟に対する伝達経路として、高句麗を通じた陸路を重視せんとする議論もあった。勿論、百濟佛教美術の系譜には時代による変遷相でもあつ



泰安磨崖佛
（忠南瑞山郡泰安邑白華山）

た。従って、伝達初期においては北方高句麗からの経由も考慮すべきだが、時代が下るにつれて次第に国家勢力の消長により、特に、公州・遷都以後に至っては、その西北方を通しての海上交通の発達により陸路よりはより比重大きな海上交通を利用して中国、南北朝並び統一王朝との直接往来が盛んになるにつれて百済佛教美術に大きく寄興した。²⁶⁾

百済の佛教はふくよかで、豊満な顔、仁慈で人間的な微笑みを漂える瑞山郡泰安、雲山の磨崖佛には百済特有の人間味が満ち溢れている。²⁷⁾

かくして泰安(白樺山)磨崖三尊佛が中国の佛像と様式、または作風によって両者がよく以ている点があることから、百済における石造佛像の初期の巨作として推定される。

このような初期様式は、国内に傳播系譜するにつれ、もっと百済様式に濾過され、そして後の三国時代の古新羅に影響を与え、新羅統一以後、石佛造成の隆盛期に連なって行ったものである。確かに朝鮮の佛像是中国の佛像の影響の下で作られ、その影響は五世紀から八世紀にかけて現れるけれども、高句麗、百済、そして新羅とも自己独特の個性ある様式を持っていた。

かくして百済石佛は、自然主義的、開放的であり、また、快活であるのに比べて、古新羅佛は抽象的で、静的であり、沈黙的であった。新羅の佛教は八世紀頃、その絶頂期に達するが、その以後から次第に衰える。新羅の彫刻は八世紀中葉を分水嶺として退化する。²⁸⁾

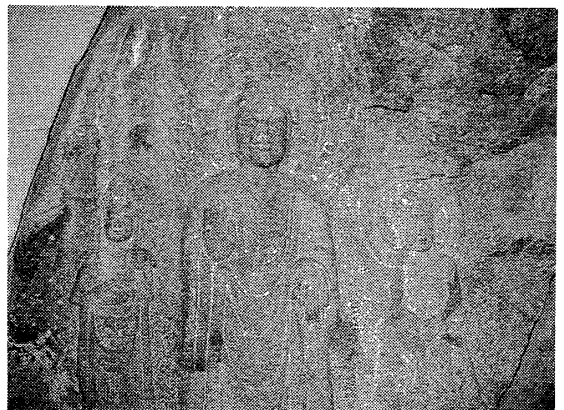
朝鮮では一番古いと言われる瑞山郡泰安の磨崖佛の堂々たる体軀は一面 隋様式を思わせるが、隋様式の如く鈍重さはなく、隋様式と一線をかく。異なる点は洒落な作風でやはり隋を溯る南朝造像との関係を思わせる。また、それは百済勃興期の七世紀初葉の作品である。

瑞山郡泰安・雲山の磨崖佛造りの技術が慶州南山に移り、全国に及びそしてそれが日本に伝わって行った。²⁹⁾ 今、日本で最も素晴らしい磨崖佛として残っているものとして、狛坂寺址磨崖佛をあげることが出来る。中国、朝鮮、そして日本のこれら磨崖佛は色々と共通点があると思う。それについては磨崖佛造立の年定比定の所でふれて見る。

良弁・審祥と華嚴經

狛坂寺址磨崖佛の歴史的背景を探るに当たり、良弁と東大寺建立、そして、東大寺における華嚴經の講説などの関係を整理する必要があると思う。

良弁は天平十二年十月八日、金鐘寺において始めて華嚴經の講筵を開いた。嚴智の推薦により新羅の審祥を招



瑞山磨崖佛
(忠南瑞山郡雲山面龍賢里)

請して講師とし、後年、興福寺初代の別当になった慈訓、鏡忍、円証を複師とした。特に講師の起用、慈訓を複師としての採用には、渡来系の学僧が重要な役割をした。慈訓の俗姓は、船氏であり、津・船・自猪(葛井)氏の先祖 王辰爾よりの分派氏族で、百済系の渡来氏族の後裔であった⁽³⁰⁾。

審祥は、奈良の大安寺に住持し、華嚴經の講説をした八世紀及びそれ以前の寺刹は、一宗に固定されず、いわば兼宗兼学であった。南都六宗も佛教のいくつかの学派集団が発生統合され、西紀七五〇年代に華嚴、法相、三論、俱舍化、成実の六宗が成立した。しかしこの六宗以外にも小さいいくつかの佛教教学派が共存していた。

奈良佛教の宗派は、大寺院の中にいくつもの宗派が共存して、その各宗派ごとに他の寺の同宗派とも交流があり、相互師弟関係が結ばれていた大寺院には宗派とよばれる特定の佛教教学研究の学僧集団がいくつも共存していた。ここに特記すべきことは東大寺で、良弁の努力により六宗が整然と共存していたことである。これが所謂六宗兼学であった。かくして東大寺に奈良佛教界では最大の学団の規模を持っていた⁽³¹⁾。また東大寺の学団を代表したのは華嚴宗であり、それは大安寺の審祥が新羅から伝えた最も新しい学問であった。その華嚴宗を唐から新羅に伝えたのは義湘であり、義湘は元曉と共に新羅華嚴宗の開祖でもあった⁽³²⁾。

日本靈異記は百済の山林佛教についてふれている。百済に山林修行が行われ、それが新羅に伝わり日本に伝来したのは白鳳時代(七世紀後半)であった。

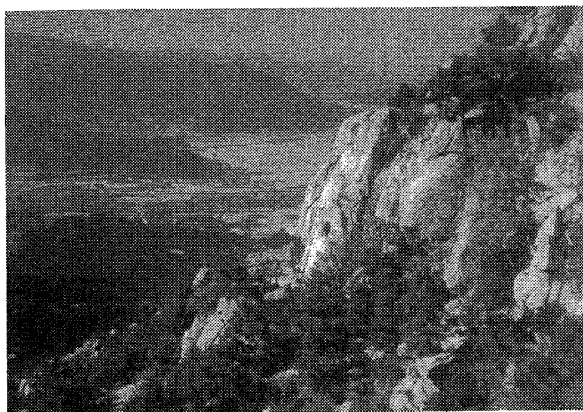
山林佛教の動きは百済及び新羅佛教の直接、間接の影響によるものである。慈蔵が開創したと伝えられる通度寺、月精寺、淨岩寺を始め、元曉が住んだ高仙寺、また義湘と関係のある浮石寺、洛山寺、梵魚寺などは山林禅居型の寺刹であった。

慶南、梁山郡、靈鷲山に庵居し何時も法花經を講じて通力を得た修行者の話も語り伝えられている。

ともあれ新羅の佛徒が同時に一種の山林行者的呪者であったことは新羅の僧、審祥が典型的な奈良の山寺である金勝寺を選んで、華嚴經を講説したそれ自体がふくみのある見のがせない事実である⁽³³⁾。

以上のような関係を考察する時、東大寺と金勝寺、そして狛坂寺址に磨崖佛が刻まれる関係が伺える。いわば新羅の佛教と東大寺の動きは、金勝山所在の金勝寺と狛坂寺とは、一つのパイプが通じていると見ては思い過ぎであろうか⁽³⁴⁾。特に、山林修行の盛んな、その時代ならば東大寺内の新羅佛徒の視角からは、金勝寺の奇岩怪石、松林の間に展開する平野、それは故国、慶州の南山との一つの類似性を見出したであろう。

狛坂寺址磨崖佛のある金勝寺とよく似ていると言う韓国、慶州の南山は、南北八軒東西十二軒で、そこには、三十五個の溪谷があり、現在まで百六十二個所の寺の址、六十八基の石塔、七十三体の佛像が発見された所でもある。南山佛蹟の特色は先づ自然との調和にあると言える。南山の寺跡は広くはないが、展望がよく、また慶州平野が目前に展開する。南山佛蹟の魅力は何と言っても磨崖佛である。荘重な岩石に多彩に刻まれた磨崖佛はま



慶州南山의地理的環境

た原始以来伝えつがれた岩石信仰と関係していると言えよう。

南山の佛像が持つている特色は自然の神妙な調和からかもし出される柔らかな、温かい親密感である。南山の奇岩怪石は、南山と引き離せない要素である為、刻まれた佛像も山の一つの要素になっている。南山の岩石と佛像との間には少しの違和感もない。山と共に、時間の流れの外に立つことになる。南山の岩石、そして、佛像は南山を訪れる人々たちに心の安定と休息、そして人間苦を離れる宗教的安定感を与えてくれる。

南山に見られる石佛は、純粹な意味での佛、菩薩であるよりも、ある意味においては、天神地祇と人間を仲介する神山靈石にその内なる或種の宗教的実存が佛の姿をかりて眼前に湧出したものではなからうか。しかも巨岩の前面に完全な浮彫像として彫刻された時、佛はまさに動的な迫力と生命力をもって石中から拝む人々の前に顕れて来たであらう。⁽³⁵⁾

このような新羅の佛教が東大寺に伝わったことを思う時、東大寺内の新羅ゆかりの佛徒たちは栗東郡金勝寺が故国の南山に似たる地理的環境に限りなき興味を持ったに違いない。金勝寺の奥深い所に狛坂寺が立てられ、その側にある一つの巨岩に、渡来人の石工技術によって狛坂磨崖佛が彫られると言うことは、当然のなりゆきではなかっただろうか。特に東大寺と新羅佛教と格別に縁の深かった良弁僧正の存在と彼をかこむ新羅佛教徒たちの眼にはこの金勝寺はまたと得難い聖地として浮かんだであろうと思われる。かく考える時、狛坂寺址磨崖佛が成立する精神的、文化的、宗教的な背景に東大寺、特に良弁僧正の教学的影響を見のがせない。早い話が狛坂寺の磨崖佛はいわゆる東大寺、佛教圏の成立過程で成り立っていると見られる。⁽³⁶⁾ このような見解を明にする為には、古代朝鮮と奈良佛教、特に奈良文化に絡む朝鮮渡来人の動きと東大寺との関係を整理する必要がある。

東大寺造営と金勝寺狛坂寺址磨崖佛

東大寺の創立は、聖武天皇の發願によりなされ、大佛は、天平勝宝元年（七四九）十月に、大佛殿、七堂伽藍は、延暦二年前後に完成された。東大寺の、大佛鑄造は国中公麻呂によってなされた。彼は事実上の指導、総責任者であり、鑄造の技術者であった。彼は、大和国葛下郡国中村に住んでいた百濟人であった。彼の祖父は百濟の德率（百濟官職四位）を持った貴族であったが、百濟滅亡後、天智二年（六六三）に日本に渡って来た。⁽³⁷⁾

聖武天皇の大佛造立の發願を支持した宇佐八幡は、元来、朝鮮半島からの渡来人によって、祀られた神社で朝鮮の神を祀っている。⁽³⁸⁾ その神社の指示により、大佛鑄造に必要な銅を提供した香春も、新羅系の渡来氏族の本拠地であった。大佛造立の發願に呼応した行基僧（六六八―七四九）の民衆佛教運動が系譜的に新羅の元曉をつぐものであった。七六才の老軀をひきさげ弟子たちを率いて大佛造営の歡進をなして来た。

国中公麻呂の大佛塗金の黄金を献納した陸奥国守、百濟王、敬福、(百濟義慈王の子孫と言う)も同じく百濟系の渡来氏族であった。また、伽藍造営の中心人物であった工匠猪名部百世、益田縄手も共に新羅系の渡来人である。⁽³⁹⁾

五三八年、欽明朝に佛教が百濟から日本に伝来して以来、約二百年に及び白鳳佛教が成立するが、それはまた東大寺建立の前衛的役割でもあり、その歴史的意義は大きい。これを要約すれば、東大寺造営の技術的、財政的、そして佛教学の視点からも、朝鮮からの渡来人が先頭に立って動いたことは明らかである。しかも歴史上に花と咲き名を残したのは渡来系の一部の上層階級の指導者と共に彼等に率いられていたより多くの渡来人が東大寺の造営に積極的に参加していた事実も忘れてはならないであろう。⁽⁴⁰⁾

狛坂寺址磨崖佛の特徴は、先づ始めに磨崖佛石像いわゆる三尊佛が堅固な花崗岩の上に彫刻されていることである。この技法は、日本にその例が乏しく、朝鮮の三国時代の百濟、特に統一新羅になって、この技法が用いられた最も特色あるものであった。慶州南山に散在している石造佛像らは殆ど全部が古新羅から統一新羅にわたって製作されたものである。これらは燦然と輝き、新羅の佛教を証明すると共に新羅人の卓越した芸術性の一面を示す重要な遺品でもあると言えよう。しかし、大部分の石像らは造成年代を知る造像銘がなく、また関係史料の不足の為、新羅彫刻史上、これらを明らかに位置づけることは容易なことではない。⁽⁴¹⁾

第二の特色は巨岩に彫刻された中尊のブロック状の構成をあげることが出来る。基本的な構造から脇侍の一八〇度左右に開いた兩足先や三道のない猪首指の表現などの細かな刻み方など三尊石像は唐風の様式をほのめかし、そして三尊は崖の壁面から完全な浮彫りになっている。

第三の特色は、何本もの紐状線と陰刻線によって表現される流麗な衣文線が際立って見える。

最後に中尊の座上、宣宇座、そして脇侍の蓮華座の形式は非常に古い。特に磨滅もそれほど目立たない。台座の下部に刻まれた格状間の形が特色である。⁽⁴²⁾

これらの特色がすべて慶州南山にある七佛庵磨崖佛と共通するとは言えないが、狛坂寺址磨崖佛と南山の磨崖佛とはよく似て居り、この地より近江国に渡来した人々が故郷の山に似た金勝寺を歩き、そしてこの狛坂に同じ巨岩を見つけ、磨崖佛を刻んだとも考えられる。狛坂寺址磨崖佛が堅い花崗岩の上に刻まれていることを考える時、その磨崖佛を刻んだ者はいわゆる朝鮮系の石工であると見ている。

ところで日本の磨崖佛を普通中国の影響によるものと簡単にかたづけ、朝鮮との関係を遠ざける傾向があるが、そうは行かないやうである。中国では大石佛と言っても雲崗、龍門、敦煌、響堂山、大龍山、麥積山などは石窟佛を開鑿したものである。中国の大体の石佛は石窟佛が主流であって磨崖佛は二次的であった。これに對し磨崖佛を本格的に発展させたのは、むしろ朝鮮であったと言えよう。⁽⁴³⁾

日本に磨崖佛刻みの技法を伝えた朝鮮佛教において、勿論、經書は大部分中国人が翻訳した漢文經書を受容し、これを日本に伝えたけれども、建築、佛像彫刻、石塔、石窟など人間の美意識が関聯する佛教文化は中国だけでなく、遠く印度や、PakistanのGandharaから直接受容した。その為に、少なからずの新羅の僧侶がPakistanの北部Gandharaを通過して印度を往来しながら修道した。それ故に統一新羅の磨崖佛らが中国の影響をともに受けたと言うよりもGandharaから直接影響を受けたと見る視角もある。朝鮮の佛教文化は朝鮮人の想像力と表現力によって創造的に変化させながら、燦爛たる朝鮮の佛教文化を作り出したのである⁽⁴⁾。

従来日本の朝鮮佛教研究の定説として朝鮮の佛教は、中国の佛教を輸入しただけである。朝鮮の佛教が中国佛教の亜流に過ぎないと言われたけれど決してそうではなかった。朝鮮には独自の佛教があったのである。

意識的に古代中国の隋唐佛教の朝鮮への影響を軽視するものではないが、日本にとって佛教の道の本流は古代朝鮮半島諸国に通じていたのである。この事実を凝視し、また冷静に評価する必要がある。いわば古代日本の佛教を明らかにする為には、その源流である朝鮮の佛教を理解せざれば、日本の佛教を正しく位置づけることは、難しい⁽⁴⁵⁾。

狛坂寺址磨崖佛を正しく理解する為には百濟、新羅、特に統一新羅における石造、佛像の理解なくしてはその正体を掴むことは難しいと言えよう。

4 狛坂寺址磨崖佛の造立

(1) 狛坂寺址磨崖佛の造立年代比定説

狛坂寺址磨崖佛の造立年代を推定することは容易なことではない。何故なれば、これに関する文献や記録、金匱または口伝を求めることが難しいからである。それ故に、磨崖佛の三尊佛に対する様式考察を基礎にして追求せねばならない。よしんば様式を辿るとしても、佛陀の身体的特徴も三三相八〇種相好などと規定され、なかなか簡単に行かない。様式上普通に取扱う印相、姿勢、衣裳など、いくつかの一定形式で規定されているが、このような特徴も信仰と教理の変遷により、また時代的におのおの異なった流れを追うことになり、時には完全になる現象も表れる⁽⁴⁶⁾。こう言うことを念頭に入れて、狛坂寺址磨崖佛の造立年代を考えてみたい。

先づ、その比定について、日本での先学のなした研究を整理し、そして、朝鮮での磨崖佛に関する研究を踏まえて、筆者の見解を述べたいと思う。

狛坂寺址磨崖佛が世間に知られたのは、一九二六年に発刊された栗太郡志卷五⁽⁴⁷⁾にそのことが既に記録され、解説がある。しかし磨崖佛の造立年代の比定になると見解がまとまらず、いくつかに分かれる。それは大体次のよ

うに要約される。

1 藤原時代説 平安時代中期後期（堀井三友）

2 弘仁時代説 平安初期（川勝政太郎）

3 天平時代説 奈良時代後期（太田古朴）

藤原時代説に立つ堀井は、一九三二年七月における現地調査を通して、狛坂寺址磨崖佛の造立年代を藤原末期とみた⁽⁴⁸⁾。その中には、これと言った明らかな根拠を提示して居らず、石佛の様式に照らしても、少なからずの疑問がある説とみている。

第二の弘仁時代説は、川勝を始め、谷口、宇野、久野、上田などが、この弘仁時代説を支えている。川勝は狛坂寺址磨崖佛の様式面を検討して、奈良時代の余波を残す平安時代初期のものと見ている。その内容については、詳細に言及していないが、その焦点を主三尊佛にしぼっている。主三尊佛が全体的にみて多少横張りのある、重厚、神秘感を伴うと言った点から、天平様式を継承しながらも、内には既に弘仁的性格を内包しているものと解釈している。特に川勝は、狛坂寺址磨崖佛が韓國慶州の南山里溪、三尊佛と通ずる形式を見出している。そしてこの磨崖佛、三尊佛の背景に新羅石佛の影響を始めて示唆すると共に、その製作の年代を弘仁期によるものと推定した。狛坂寺址磨崖佛を新羅石佛と関係あると指摘したのは卓見であったと言えよう。一方、狛坂寺の縁起によれば、狛坂寺の創立が平安初期であるから（磨崖佛についての記録はない）磨崖佛が刻まれたのもその頃にしぼっているようである。そして、谷口も、同じ見解に立っている上田も、奈良時代の様式を踏襲しての平安時代前期のものとみている⁽⁴⁹⁾。

これらの見解に対して天平時代説を主張しているのは、太田、辰、細川らである。彼等は、狛坂寺址磨崖佛の現地調査を通して様式上からこの磨崖佛は平安時代によるものではなく、むしろ、天平様式に立つ奈良時代石佛であると主張している⁽⁵⁰⁾。太田を中心とする天平時代説は純粹に様式論に立った年代観である。また斎藤は、天平時代説に立ちつつも、狛坂寺址磨崖佛が、金勝寺や狛坂寺との関係のうすさに注目し、かつまた磨崖佛の様式的見地からこの磨崖佛造立の背景に、一時代前にこの地域に入山していた金肅菩薩、いわゆる良弁を想定する見解を持つている⁽⁵¹⁾。

一方、田中は前にあげた諸説が様式論を無視したものとみた。そして彼自身、狛坂寺の磨崖佛と印相、姿勢、衣裳、そして彫刻様式を注意深い検討により、平安時代は言うに及ばず天平と言うよりも白鳳時代、即ち七世紀後半とみている。

最近、狛坂寺から、白鳳期の瓦が出土したことは、文献より更に溯る。白鳳期の寺院の存在したことを意味す

る狛坂寺及び金勝寺に遡って白鳳期の伽藍の建て並んでいた可能性が出来たのである。そして、狛坂寺址磨崖佛もこの寺院建立と共に作られた蓋然性が強まって来る。或いは狹隘なる地形からみても、この磨崖佛を禮拜する堂として建立されたのかも知れない。これらは、田中の主張する狛坂寺址磨崖佛の白鳳期説を裏づけるものと見られる。しかし、この説が確立するまでには、少なからずの傍証が必要であろう⁽³³⁾。

これらの見解の外に狛坂寺址磨崖佛彫刻の技法と石工集団に焦点をあてる丸山の視覚は、注目すべきものがある。彼は、金勝山麓において、六世紀頃から新しい石工集団が誕生したと見ている。それは、近江の石棺材質が六世紀中葉を界に凝灰岩から花崗岩へと飛躍的に技術変化を遂げ、この花崗岩石質、石棺の分析から栗太郡栗東町、荒張所在の金勝山山麓に石部集団が居住し、この山腹の石材を用材としていたと考定した。

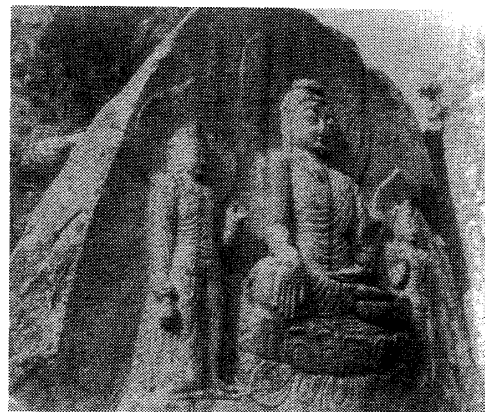
なお、丸山は韓国慶州の国立博物館所蔵の『南山佛谷出土の石棺』のうち、規模化にのっとったと思われる大津市田上（たなかみ）里町、池の谷里古墳、或いは、栗太郡東町上砥山、古墳等の石棺と技法的にも形状の上からも極めてよく似ていることに注目している。このようなことは狛坂寺址磨崖佛の技法的な面を考える時、見のがせない要素だと思ふ⁽³⁴⁾。

久野にも日本には新羅の工人が朝鮮から来て造ったものと思われる石佛が二つある。その一つは滋賀県の狛坂寺址磨崖佛で、今一つは山口県小野田市にある。これら磨崖佛のある周辺には、点々と白く花崗岩が露出している。いわゆる地理的環境は朝鮮の南山菩薩寺山（小野田市）と金勝山はよく似ていると指摘している。そして、久野は磨崖佛の造立年代を新羅時代とみている。

特に、狛坂寺址磨崖佛を見てうける感じは一種の違和感、大陸的、朝鮮半島的な彫刻の技法は、日本の繊細さよりも、様式の生々しさが見られる点などを考える時、本国において長年多数の彫刻を経験した渡来人の技法であることに違いない⁽³⁵⁾。

朝鮮でも、石造美術として優秀な作品は、三国時代から、統一新羅に及ぶ時代のものであり、その時の佛像などは佛が持っている精神性を直接的に素朴な表現様式を通して、正確に表現している。けれど、その後の佛像作品は、佛教自体の墮落と表現技術の形式化、彫刻技術の退化などによって、全般的に幼稚であり、俗っぽくなっている。いわば八世紀は新羅彫刻の絶頂期であると、同時に八世紀中葉を分水嶺とし、退化が深まる⁽³⁶⁾。故に朝鮮で統一新羅八世紀前半頃の佛像彫刻研究は重要であると言えよう。

其の間韓国でもそれなりに佛像について研究をなし、若干の調査論文も出ているが、慶州の南山にある石像群に対する美術史的其の他の調査研究があまりなされていなのが現状である⁽³⁷⁾。故に、石佛彫刻の年代をはっきりと比定することは難しい。しかし古新羅の彫刻を反映している慶州、南山の七佛庵三尊佛を素材に検討してみたい。勿論、七佛庵、三尊佛に対する造立年代への接近も色々な見解に分かれるけれど、一応狛坂寺址磨崖佛と



七佛庵三尊磨崖佛
(慶北慶州南山)

七佛庵三尊佛の体躯上の比例、顔の表情、衣裳、彫刻技法上の特徴などを、比較することによって、狛坂寺址磨崖佛の造立年代を比定してみたい。

(2) 七佛庵、狛坂寺址磨崖佛の彫刻様式

七佛庵寺址の西側に立っている半月形の花崗岩（高さ約四・五米、下幅七・五米）に三尊佛が浮彫されている。即ち、この三尊佛とその下に四面石佛が廣い岩面に刻まれている。それが為に七佛である。三尊佛の中央には中尊が蓮華台座に正しく結跏趺坐して居り、左右には脇侍が中尊に向かって若干体をひねり直立している三尊の址には無文の大きい宝珠形頭光がある。この三尊佛と四面石佛の彫刻様式からみれば、両者は同じ時期に製作されたものと見られる。先づ、七佛庵の三尊佛、狛坂寺址磨崖佛の様式と構図面、彫刻技法面の視点から総合して見よう。

七佛庵の三尊佛が本尊を中心に左右対称の位置に脇侍が配置されているのは、図像的な形式であるけれど、左右の脇侍像の描写によって、対称的な構図を避けて自然的に配置している。全体の彫刻表面を単純化した点がある。また、菩薩の表現において、天衣が簡単にされて居り、全体の雰囲気は散漫にしている。

中国においても、七世紀以後から佛像表現において寫實的な面が強調されると同時に、天衣や瓔珞が単純化されている。また、三尊佛像の両脇侍表現において、対称的な技法が次第になくなり、則天武后（六八四―七〇四）に至っては、一定形式を表すようになる。

七佛庵三尊佛において、脇侍の直立する姿勢や、三面飾、宝冠主などは、宝慶寺の像とは異なるが、天衣の瓔珞が単純化されている。そのような表現は古新羅の伝統的な様式を反映している。これと同じく狛坂寺址磨崖佛もこれとよく似ている。このような様式の特徴を持つ三尊佛は八世紀に入っては、中国では長安の宝慶寺の三尊佛らがその姿を示しており、その源流が新羅と日本に伝わり、各地方的特色を持ちながら、造立されたものと思う。また、七佛庵三尊佛像にある觸地印の手印が、中国から新羅に伝来したもので七佛庵の三尊佛の形式を見ると、八世紀初葉に造られたものと解される。

狛坂寺址磨崖佛は高さ六米、幅四・三米程の花崗岩の上に三尊佛を浮彫りにした石像である。中心には宣字座に裳をかかざって坐している中尊が、その左右の中尊に向かって巧みに腰をひねって蓮華座に立つ両脇侍があつて三尊を構成している。この三尊の下には長い基台があつて、その側面には古い様式の格狭間（こうざま）がある。そして主三尊の上方、左右には二組の三尊佛三体の菩薩立像が深く肉彫りして重感と立体感をよく表しており、その各々の佛像には光背がない。



狛坂寺址磨崖佛
(滋賀県栗太郡栗東町荒張)

中尊は衣を右肩脱ぎに着、両手の指にやや異様なよじれを表している。左手は伏せて甲を前に出し、胸部にあてている。どうやら当時の正規の印形とは珍しく、他にその類を見ない特殊な印相を結んでいる。或いは中尊の手つきが極めて幼稚な表現だと言う人もいるが、逆にこの手の刻み方こそ極めて巧みな表現であると言われる。説方印を浮彫りにする為に、それを側面から見た形で、刻んでいると言う。三尊佛の立体感を出す為に、両脇侍の両足を真横一八〇度に開いたように表現している。慶州南山の七佛庵磨崖佛の両脇侍も同様な形で両足を表現していることは前にふれた。

ブロック状の構成と言った基本的な構造の他に、三道のない、猪首指の表現などの細かい刻み方など、共通する点が多い。また、肉体美がうすい天衣を通して、効果的かつ寫實的であり、形式的な写実に墮落していない素晴らしい作品である。このような姿は基本的に石窟庵本尊とも一脈通ずる技法であるとも言える。こうした点からも慶州南山の七佛庵磨崖佛と狛坂寺磨崖佛との関連性が伺われる。

狛坂寺址磨崖佛の中尊の堂々たる体軀、開かれた肩、偏平な胸、そして廣く開かれた膝など、自然的で無理がなく、安定した姿である。唐の彫刻技法に見られるような目立って大きい作り方を示す姿勢でなく、体軀の上下の間隔が短い点など、唐佛のもつ特色をほのめかしているが、それは何処までも新羅的な特色を示していると言えよう。中尊の筋肉の表現は慶州石窟庵本尊に見るような弾力性はないけれども、七世紀後半と推定される。軍威石窟本尊像の如く七佛庵、狛坂寺の中尊は、鈍重な感じは与えない。勿論、七佛庵の三尊佛は狛坂寺址磨崖佛の中尊よりは鈍く太い感じはするが、軍威のものとは違う。

狛坂寺址磨崖佛の中尊の円い顔には、かすかな微笑と威厳が表現されている姿が、やはり古新羅の様式である。また、それは八世紀初葉の彫刻様式の特徴と言える。中尊の顔に威厳が表れるのは、佛像が理想化されてゆくものであり、それが八世紀中葉に入ると微笑が去り、厳肅な顔になる。七佛庵磨崖佛の中尊の顔に浮かぶ微笑は、狛坂寺址磨崖佛の中尊に比べて今少しはつきりと表現されている。

狛坂寺址磨崖佛中尊の厚みのある額、半分開いた眼、三日月形のまつげ(睫毛)、慈悲に満ちた顔、軽く閉じた口唇などの彫刻技法は本尊に生命力を与えている。花崗岩を利用してこのような生命感と迫力(感)を与える彫刻の卓越さ、これを刻んだ石工たちは、素晴らしい技術の所有者であったに違いない。七佛庵の中尊の顔は狛坂寺中尊に比べて上下に長く、鼻が大きく高いのを除けば、殆んどよく似ている。七佛庵と狛坂寺址磨崖佛の中尊の顔は、新羅佛教の特色を最もよく表している。温和な感じのする童顔が丸く微笑を表しており、特有の親密感がある。これは、古新羅時代の彫刻の伝統であり、古新羅時代の純朴な微笑は新羅の特色でもあった。

狛坂寺址磨崖佛の中尊の天衣は脇侍と同じくすべてうすいものであり、肉体の屈曲をよく表しているが、中尊の衣裳は脇侍に比べて重く表言されているのは、体軀の差からもそのように感ぜられると思われる。七佛庵磨崖

佛中尊の天衣の取扱いは狛坂寺の中尊に比べて、繊細ではなく、簡略化されているのが目立つ。

狛坂寺の中尊の偏袒右肩の衲衣は、その衣褶が形式的であるようだが、極めて自然的に表現されている。

狛坂寺址磨崖佛の中尊をかこむ両脇侍の頭部は、高刻りされて宝髪を結び、三面頭飾をつけている、首、腰、膝を、ややひねっていた三屈法を示し、両脇侍の肩と腕は、柔軟な輪郭を描きながら、垂れ下り、細い腰と均整のとれたその彫刻の技法は、体にうすく、密着した法衣と共に、立体感を効果的に表現している。簡単な三面頭飾、胸飾りの外にはこれと言った装身具は見られない。そのような彫刻法、法量（佛像の大きさ）相好、衣紋などに至るまで、その技法は、両脇侍とも異なる所がない。⁽⁶⁴⁾これらは慶州の石窟庵、七佛庵の磨崖佛よりもその技法において柔らかい線を自由に駆使しているように見える。

佛像彫刻に現れるこのような官能的な表現形式は、印度の Gupta 朝五世紀後半から始まる。中国では唐代、特に八世紀前半期にその絶頂に達する。このような唐代の彫刻様式の影響がいち早く統一新羅の佛像彫刻にも反映されている。⁽⁶⁵⁾その技法が狛坂寺址磨崖佛の両脇侍の彫刻にも現れたと見られる。頸部は、三尊佛とも短縮されて居り、特に中尊は顕著である。そして、首には、斉朝期に表れ始まる所謂三道と呼ばれる横走りのシワ（皺）は刻まれていない。

狛坂寺址磨崖佛の三尊佛とも通肩の天衣が全身をおおい、素朴な身部、左右に垂れ下り、両脇侍は全体として優雅で温和な容貌の技法を見せている。七佛庵両脇侍の天衣の下からは衣褶がU字形に数段の平行線が走って、鮮明に刻まれている。両脇侍の胸の上には天衣が対角線にかけられており、褶衣には腰帯が廻らされている。この如来像の衣褶処理方法は、本尊に比べてはるかに洗練されている。此の衣褶は斉朝期を追いながら、強靱な身体の屈曲をほめかしている。しかし、七世紀の末頃から八世紀に至るに及び、写実味が強くなり、次第にその強靱さがなくなり、形式的な外形、写実に墮落してゆくのであるが、この狛坂寺址磨崖佛の技法においては、そのような気配はなく、優雅そのものである。

更に、衣紋の表現技法を見れば、中尊の偏袒右肩の平板状の衣裳のひだは八世紀に入り目立つ様式変遷を見せ⁽⁶⁶⁾ている。この波紋状の衣裳のひだ表現は、古新羅時代の石造佛像に多く使用された技法である。現存する三国時代新羅の佛像の中で、最も古い石像と推定されている断石山の磨崖佛に見ることが出来る。

狛坂寺址磨崖佛中尊の平板状の衣のひだも、明らかな変化を見せている。この点七佛庵の中尊とも殆どよく似ている。七佛庵の中尊はひだとひだとの間を陰刻の線で、衣の厚さを表現しているが、衣を胴体と明に分離している。狛坂寺中尊の衣裳のひだ表現の今一つの特色は、足首の下に展開されるΩ形の衣裳のひだで、石窟庵本尊の扇型が、ここでは平面的に表現されたものと言える。⁽⁶⁷⁾この衣裳は、印度の Gupta 期の独立された坐佛像に現れる。この佛像から手印は、觸地印としており、新羅でも石窟庵本尊と、菩提寺址の坐佛像が同じく、觸地印の像

に多く現れている。腰衣を着し天衣が両肩から膝前を二段にわたって反対側の腕にかかけ、蓮華台座の外側まで垂れている。七佛庵の脇侍は狛坂寺の脇侍に比べれば、頭部が大きい方であり、下身部に比べて上半身が豊満であり、太く長い腕を示す。

七佛庵の三尊佛に向かつて、左の脇侍は、右手に宝瓶を持つて居り、向かつて右側の脇侍は、右手に蓮華を持つて居る。両脇侍とも偏袒右肩履をつけて両足先を開いて立っている。この派、独自の同じく觸地印、偏袒右肩の石佛である。狛坂寺址磨崖佛の両脇侍の足の開きもこれと同じである。これは、中国江南独自の様式であることは明瞭で、南山佛像の祖系が中国の江南の一地域にあり、また狛坂寺址磨崖佛にあることを立証する。七佛庵両脇侍、特に狛坂寺の両脇侍のその優美な刻み方も、南方的な感じのする華麗な宝冠や、璽珞の作りが細緻で、天衣の柔らかな動きに特色がある。下衣を両足に巻きあげた特殊な姿は、七佛庵、狛坂寺址両脇侍も同じである。このような姿は中国江北の石造佛像には殆ど見られない。これはとりも直さず、中国江南の唐様式で、それを輸入したものと思われる⁽⁶⁸⁾。

最後に、狛坂寺址磨崖佛で、今一つ特色あるように表現されているのは、蓮華台座である。仰蓮の蓮瓣をふくらみがあるように写実的な形で全体を実際の蓮華に低く刻んだ点である。即ち仰蓮、伏蓮の蓮の大きさが異なり、上方の蓮瓣が大きいのが特色である。一方七佛庵の三尊佛の蓮華台座も九個の蓮瓣を中心に左右に四葉づつ配置しているが、対称をなして居らず、自然的に刻まれている。蓮華台座は仰蓮と伏蓮が共につき、二重の高い蓮華台座をなしている⁽⁶⁹⁾。このような形式の蓮華台座は、印度GuptaやPala朝時代の佛像に多く、中国には隋時代の佛像に多く見られる。

新羅において個々の蓮華が写実的になるのは八世紀に入つて目立つて表れるが、写実的な蓮華を刻む例は餘り多くないと言う。このような蓮華台座は中国の佛像では、永昌元年（六八九）の石佛坐像や、長安、宝慶寺の長安三年銘（七〇三）の三尊佛にその形式を見ると言う。そして、狛坂寺址磨崖佛にその形式の刻みが見られ、その様式面で前記の中国の石佛坐像と宝慶寺の三尊佛、四面石佛の蓮華台座が狛坂寺址三尊佛と関係があると思われるのは無理であろうか。勿論、七佛庵四面石佛の彫刻技法は、三尊佛（磨崖佛）に比べれば彫刻の技法の荒いのがうかがわれる⁽⁷⁰⁾。

七佛庵三尊佛の特色は、七世紀後半の唐式彫刻の影響を受けていると同時に、また印度佛像との様式的関連性もほのめかしている。当時の新羅僧侶などの印度への往来があり、また唐に留学した僧侶の中には印度の聖地を巡禮して帰国した僧侶たちに学んだ人々もあったので、このような影響は考えられる⁽⁷¹⁾。

以上、述べたように、七佛庵三尊佛の造立時期は、図像的に或いは様式上の特色から見て、七〇六年頃から七一九年の間に造立されたものと推定される。いわゆる七佛庵三尊佛は古新羅の伝統的様式と中国唐代の七世紀末

から八世紀初半頃の造像様式の影響を受け、新しい様式が形成された彫刻品と見られるいわば、このような様式上の特徴は、八世紀中葉に完成された石窟庵の彫刻から見られる宗教性の充満された、厳粛な顔、弾力性のある胴体、単純化された本尊像の衣裳のひだ、両脇侍の自然的な柔らかな天衣などの完熟された彫刻技法に発展してゆく過渡期的な作品と見られる。

七佛庵三尊佛が持つている図像的、或いは様式的な特色は、中国唐代の佛像と、狛坂寺址磨崖佛、即ち、日本奈良時代の佛像と比べれば、統一新羅八世紀前半期の佛像彫刻、様式の発展経過を把握するのに重要な契機となると思う。

要するに、七佛庵三尊佛は四面石佛も含めて、新羅統一初期に造立された佛像らは統一新羅最盛期様式（八世紀中葉）に至る過渡期的様式で、八世紀前半の造立と見ている。一方、狛坂寺址磨崖佛は既に七佛庵の三尊佛と比較してみた通り、図像的な面でも、或いは彫刻様式上の特色など、統一新羅の八世紀前半期の造像様式を代表する七佛庵の三尊佛よりは、後になるのではないかと思う。狛坂寺址磨崖佛、三尊佛の顔に漂う微笑など、八世紀の中葉は越えられない。

結局、狛坂寺磨崖佛造立を八世紀前半から中期に至る間に作られたものとみたい。

(3) 百済系渡来人との関聯

以上、この狛坂寺址磨崖佛の造成年代を、比定する為に、瑞山郡泰安の磨崖佛、慶州南山の七佛庵、そして狛坂寺址磨崖佛の様式を簡単に比べて見た。その結果、狛坂寺址磨崖佛は、七佛庵磨崖佛よりも繊細で柔らかな優雅さ、そして限りなき人間味のある生命感を感じた、いわば統一新羅的彫刻技法の底には百済固有の優雅さ、明るさを漂わせている点に留意したい。

近江は、天日槍を始め、新羅ゆかりの土地でもある。信楽貴の焼物など、それを物語るけれど、記録上に明らかに百済の白江（白村江）敗戦以後、大多数の百済系の渡来人が近江に進出したのが目立つ。彼等の活動、そして定着状況もはつきりと記録されている。近江各地の地名、寺刹などの跡を辿れば、百済との縁故が新羅よりもはるかに多く、また、深い関係を持っている。蒲生郡石塔寺にある三重の石塔も百済からの渡来集団によって建立された。いわば、近江は大和と共にどちらかと言えば、百済勢力圏の地でもあった。特に、田上から金勝山にかけての一带から天然産の鑛産物を求めたとすれば、この山中に探索し、生活の場を求め、道を開いていた百済系渡来氏族の存在がいやが上にも浮彫される。

狛坂寺址磨崖佛を、新羅人の作品だと無条件に片づけてしまうのは少し無理があるような気がする。久野は八

く九世紀頃、この辺りに住んでいた渡来系の僧侶たちが、新羅から石工を呼んで、磨崖佛を刻んだのだと言っている。(本文註76参照)しかし、朝鮮の石造美術は、百済から始まった。とりも直さずその源流は百済にある。百済の石工は美術的に優れた豊かな技法を持っていた。その背景として、韓國の瑞山、または唐津を中心とする地域一帯は、百済時代において對外交通路の中心地域であり、関門として、当時の軍事的要地でもあった。故に、早くから中国の南北朝を通じて佛教文化の伝来が朝鮮半島の他地域よりも先立って流入したと同時に、上記の中国からの移民も来入し、百済に同化されたと思う。彼等の影響によって、百済人は早くから石造彫刻の技法を習得、開発し、そのような地理的、文化的な好条件から、この泰安の磨崖佛が西暦六〇〇年頃に造成された。百済人は百済滅亡後、古新羅に佛像、寺刹などの建立技術を伝え、統一新羅の隆盛期を迎えた。その底流には、三国末期に吸収された百済の石佛芸術に秀でた人々の限りなき貢献があったことを忘れてはならないと思う。

一方 白江(白村江)敗北後、或いはその以前から日本に渡来、亡命した百済人が近江に定着して、百済系の人々にとって当代信仰の支持をうけて禮拜対象であった磨崖佛を造立し、または韓國扶餘にある石塔と同じ三重の石塔を建立して彼等は異国で望郷の念を慰めたものではなからうか。いわゆる百済からの渡来集団、及びその子孫たちが、金勝山に鉱産資源を求め、その山に彼等の持ちまへの技術で狛坂寺附近にある巨大な花崗岩に、磨崖佛を刻んだのではないかと推測される。特に六世紀の頃、金勝山の山麓に石工集団の存在を語る今時、はたまた当時の日本と新羅との政治的關係を考える時、新羅系の渡来人よりは、百済系の渡来集団の技術に焦点をしばって見たい。狛坂寺址磨崖佛の造立と狛坂寺建立の前後關係について、金勝山、狛坂寺建立以前に、磨崖佛が刻まれたのではなからうかと言う見解があるが、そうなれば、日本と新羅との国交關係からみて、新羅人と狛坂寺址磨崖佛との関連性は、なお縁遠いようである。

三国時代における新羅の佛教文化、特に造像美術の全盛期を八世紀初葉から、中葉までと考える時、中葉以後からは退化が始まり、石佛の美術的な質が低下する。このような条件下で狛坂寺址磨崖佛造立年代を推定する時、八世紀の初めから中頃にかけて、近江の百済系渡来人集団の子孫らの技法によって彫刻されたものではなからうかとも思われる。燦爛たる百済の文化に新羅と言った假面をかけたのが、統一新羅の佛教文化であり、石佛彫刻の隆盛期を迎えた時代であったと言え、言い過ぎであろうか。

5 山口の磨崖佛と大分の石佛

山口県小野田市真土郷にある菩提寺山(約一三〇米)にも、朝鮮渡来人と関係ある磨崖佛がある。新羅の石工が自然の花崗岩に刻んだ磨崖佛で、高さ七〇^セの台座の上に刻まれた石像の高さは三・一^ミに及ぶ。量感のある姿、顔、手の表情、首飾りなど、堅い花崗岩の上に、のみ(鑿)で刻んでいる。うすいながら、立体感のある浮

彫りの技法で刻み、その特徴は、滋賀県狛坂寺址磨崖佛と似ている。また、菩提寺山の磨崖佛にもつとも近い様式を持つているのは、慶州南山の七佛庵の石佛である。

小野田市にある菩提寺山の地形は遠くから眺めると慶州の南山、泰安の白樺山、そして滋賀の金勝山の如く、点々と白い花崗岩が露出している。このように花崗岩の卓越地域に、しかも共通の地理的環境のもとに、磨崖佛が存在することは、その性格と造成年代を明らかにする上で、一つの謎を解く手がかりになるう。

現在も小野田市及びその近くには、須恵町と言う地名や、須恵器を焼いた窯跡が多数残っている。小野田市も一九二〇年頃までは、須恵村と呼ばれていたが、それが変わって小野田町になり、そして小野田市になった。この附近にはかつて朝鮮からの渡来人が多く住み、須恵器などの製作に従事していたことを物語っている。即ち、住民たちの為に大石佛磨崖佛を刻んだと言う。この磨崖佛は八世紀から九世紀にかけての作品で、日本最古のものと言っている⁷³。

そもそも山口県一帯は、古代百済との関係も深い。西暦六一一年、百済三十代武王の、十二年に百済二十六代の聖明王の三番目の子、琳聖太子が、山口県防府市の多多良海岸に上陸した。その時、日本では推古天皇十九年であった。今も山口県には琳聖太子と関連する古墳と供養塔があり、伝説またはその遺蹟が多い。なお、この海岸には今も百済部神社があり、百済部と呼ばれる村がある。平生湾には韓浦（からうら）と呼ぶ所がある。百済部は何時頃出来た集落であるのか、その文献を追うことは難しい。

地元の人々の語るところによれば、むかし、百済の国使が上京の途中、風浪を避けてこの平生湾へ上陸し、そのまま定住したと伝えられる。土地の人々の言い伝え、または、百済滅亡後、亡命の民として渡来の途中、風浪をさけて、或いは安住の地として上陸し、そのまますみついた名残でもあると言えよう⁷⁴。

長門、周防の古代となれば、この琳聖太子のことを抜きにしては考えられない。現在、琳聖太子を祖とする大内氏は、はっきりした歴史上の生きた人物群で有名である。琳聖太子の父にあたる聖明王は、武寧王の皇太子と生まれ父君の後をついで、百済中興の英君と言われた。公州から、扶餘に都を遷し、中国の梁と交易し、文物を取り入れ、燦爛たる百済文化を築き上げた。日本に佛教を伝えた古代の渡来人を語る上で忘れられない存在である。

以上のように、山口県は日本の西端に位置し、古代から朝鮮との関係は深かった。けれど佛教伝来以後の遺品で、その直接的影響を物語る作品は、極めて少ない。この菩提寺山の菩薩佛の磨崖佛は、そう言った点でも意義あるものと言えよう。

磨崖佛のことになると、また素通り出来ないのが大分県にある石佛である⁷⁵。大分県は瀬戸内海を通じて、畿内を結んでいたことが残っている佛教遺蹟や古墳群、或いは数多い民俗資料によってそれが伺われる。畿内文化と

深い関係を持つ宇佐八幡文化、国東半島及び大分大野川流域など、県全域にわたる佛教文化、これは朝鮮からの渡来人によって伝えられた北九州文化が浸透していることを物語っている。特に大分県にある石像はその作り方の技法も異なっている。有名な臼杵地方を中心とする佛像是木彫りの作りでそのような深刻みの佛像是韓半島には少ない。しかし、国東半島から以北の場合になると、淺彫りの石佛になると、このうす彫りの磨崖佛は、慶州南山を中心とする韓半島には数多い。

磨崖佛のある臼杵は、国東半島から南の別府湾を間に挟んで、大分市東南方の臼杵市にあつて有名である。臼杵の磨崖佛は国東半島のそれに比べて深彫りである。しかしこれは平安時代以降に彫られたものであると言う。これは石佛の日本化が進んだことを物語る。その源をたたせば同じものである⁽¹⁶⁾。この磨崖佛については機会を改めて書いて見たいと思う。

6 結論

日本の近江(滋賀県)にある狛坂寺址磨崖佛の歴史的背景と彫刻年代比定に関する考証的研究は、中国、韓国、日本、三国の佛教彫刻史研究上重要な素材である。

最近、韓国の泰安白華山磨崖三尊佛、雲山面龍賢里磨崖三尊佛が調査報告されることによつて忠南瑞山地方は百濟時代、佛教造像美術の先駆地域として証明された。これら磨崖佛に、六世紀から七世紀初め頃に刻まれたもので、六朝、隋末、唐初の大體様式の影響を受けている。このような百濟の造像美術は、新羅に伝えられ、それが日本に渡り近江の狛坂寺址磨崖佛の彫刻に多大な影響を与えている。

金勝寺、狛坂寺創立と狛坂寺址磨崖佛の彫刻は、奈良東大寺造営を中心とする奈良佛教の成立発展とも関連している。狛坂寺址磨崖佛の宗教的靈地としての位置選定、磨崖佛の彫刻様式そして山林佛教思想などを考慮する時、韓国慶州所在の石佛群、特に南山の七佛庵三尊佛とよく似ているのは明らかである。両者の三尊佛の印相、姿勢、衣裳など、彫刻様式の考証により狛坂寺址磨崖佛の彫刻年代を八世紀初葉から中葉とみたい。

狛坂寺址磨崖佛を刻んだのは、新羅の石工と見ているが、視角をかえれば百濟系渡来氏族の子孫らの技術による作品ではなからうかとも考えられる。特に、早くから中国の石造佛像の技術は百濟によつて取り入れられ、またそれを消化し古新羅に影響を与え、ついには統一新羅の佛教文化の隆盛をもたらした。印度、中国、韓国そして日本に伝わる佛教文化の伝播経路、磨崖佛の位置選定における地理的環境の類似性、彫刻様式の変化、近江における百濟系渡来氏族の活躍など、幅広く多角的に考証する時、狛坂寺址磨崖佛は新羅の石工よりも百濟系渡来氏族がより深い関係を持つているように思われる。

古代日本における韓系移住民の足痕を明らかにする為に、狛坂寺址磨崖佛をはじめ、大分・山口県など、各地

の磨崖佛に対して今少し丁寧に調査する必要があると思う。

謝 辞

本文を書きあげるにおいて、現地調査や資料あつめに、また、御教示を戴いた金燦三、林漢洙、朴智洙、劉永暉、李文鍾、崔信浩、上田正昭、日下雅義、足利健亮、進藤賢一、池田碩、河島一仁の諸先生、出口正登・晶子夫婦、Roger McCoy, Thomas Kontuly, James Davis の皆様方にお世話になったことを記して感謝の意を述べる。
(ユタ大学地理学科教授)

《註》

- 1 今までの古代の渡来人について書いた論文は韓国とか韓系と言った言葉を使った。けれど、この素材を取扱う上において、日本の古代資料がすべて朝鮮と書いてあるので、それを韓国、韓系と原著書の同意なく改めて書くことにためらい、そのまま朝鮮にした。けれどその外はすべて韓国とした。
- 2 狛坂寺を駒坂寺または高麗坂とも書くコマ(高麗)は高句麗を意味する。今は狛坂寺で通している(林博通(一九八二)『石山寺に蔵する古瓦譜およびその古瓦について』『考古学雑誌』第六七巻四号、六一―六二頁、田中日佐夫(一九七六)『狛坂大磨崖佛とその周辺』『日本文化史論叢』柴田実先生古稀記念会、大阪、五三二頁、『近江栗太郡志』(一九七三)栗太郡役所編、志賀、一六頁参照)
- 3 吉田東伍(一九六九)『大日本地名辞書』上方(第二巻)富山房、東京、六二四―六二五頁
天平宝字四年(七六〇)頃に成立した『家伝』下(藤原武智麻呂伝)参照
- 4 上田正昭(一九八九)『古代の道教と朝鮮文化』、人文書院、東京、二五三頁
Chung-Myun Lee (1989) 『A study of shinto shrines in acient Japan』、『Geographical Journal of Korea』vol.14 Seoul
19~21頁
- 5 中村直勝(一九二二)『婦化人と近江文化』、『説苑』、第七巻第六号、東京、六一九―六二〇頁
延喜五年(九〇五)に始め延長五年(九二七)に完成した全五十巻の中で、巻九、十には当時の政府が認めた神社が収録されている。その中、三三三座・二八六一処の社が所謂武内社である。
- 6 中村直勝(一九二二)前掲論文 六二五―六二六頁
- 7 上田正昭(一九八九)前掲書 二五三―二五七頁
- 8 段熙麟(一九六三)『近江の百済寺』、『韓来文化の後栄』(下)、金正柱編、韓国資料研究所、東京、一八六―一八九頁
金達壽(一九七二)『日本の中の朝鮮文化、近江大和』講談社、東京、七二―七六頁
司馬遼太郎(一九八八)『街道をゆく』、朝日文庫、東京、二六頁
- 9 段熙麟(一九七六)『日本に残る古代朝鮮』(近畿編)創元社 大阪、三三三―三三六頁
金達壽(一九七二)前掲書 七八―八二頁
- 10 上田正昭(一九八九)前掲書 二五六―二五七頁
石原進・丸山竜平(一九八四)『古代近江の朝鮮』、新人物往来社、東京、一五〇―一五二頁
- 11 上田正昭(一九八九)前掲書 二五七―二五八頁

- 石原進・丸山竜平（一九八四）前掲書一二二～一二三頁
- 中村直勝（一九二一）前掲論文六二六頁
- 石原進・丸山竜平（一九八四）前掲書六二六～六二七頁
- 中村直勝（一九二一）前掲論文六二五～六二六頁
- 谷川健一・金達壽（一九八八）『地名の古代史』（九州篇）河出書房新社、東京、二八、四七、六五～七二頁
- 山口恵一郎監修、本間信治（一九七八）『日本古代地名の謎』、新人物往来社、東京、二〇〇～二〇一頁
- 山口恵一郎（一九七六）『地名を歩く』、新人物往来社、東京一七頁、鏡味完二の日本地名学―科学編参照
- 上田正昭（一九七二）『近江朝鮮の歴史的意義（下）』『蒲生野』七号 八日市郷土文化研究会、八日市、六～八頁
- 石原進・丸山竜平（一九八四）前掲書一一一～一二二頁
- 上田正昭（一九八九）前掲書二五八頁
- Chung-Myun Lee (1987) 『The Vestiges of Korean Migration on the Sanin and Hokuriku Regions in Ancient Japan』
『Journal of Geography』 vol.14, Seoul National University ~ Seoul ~ 237~240頁
- 山尾幸久（一九八二）『朝鮮からの移住民』『日本と朝鮮の古代史』、三省選書五七、東京、一七三～一七六頁
- 田中日佐夫（一九七六）『狛坂大磨崖佛とその周辺』『日本文化史論叢』、柴田先生古稀記念会 大阪、五三〇頁
- 太政官符（寛平九年（八九七）六月二三日）
- 石原進・丸山竜平（一九八四）前掲書一三九頁
- 田中日佐夫（一九七六）前掲論文五三一～五三二頁
- 金達壽（一九七二）前掲書八七～八九頁
- 『続日本後紀』奈良・平安時代の朝廷で編集された六つの国史の一つ（日本書紀、続日本紀、日本後紀、続日本後紀、文徳実録、三代実録）
- 石原進・丸山竜平（一九八四）前掲書五三六～五三七頁
- 吉田東伍（一九六九）前掲書六七三頁。今村鞆（一九四〇）『朝鮮の国名に因める名詞考朝鮮總督府、서울』
- 堀池春峰（一九七三）『華嚴經講義よりみたる良弁と審祥』『南都佛教』三十一号、奈良、一一三頁
- 吉田東伍（一九九〇）前掲書六七三頁
- 今村 鞆（一九四〇）『朝鮮の國名に因める名詞考』朝鮮總督府中樞院 서울 三〇頁
- 田中日佐夫（一九七六）前掲論文五三〇～五三一頁
- 齊藤 孝（一九七三）『江州狛坂寺址大磨崖佛私見』―『我国奈良時代と統一新羅の石佛』
- 原弘二郎先生古稀記念、『東西文化史論叢』、京都、三三一～三三二頁
- 石原進・丸山竜平（一九八四）前掲書一三八～一三九頁
- 齊藤 孝（一九七三）前掲論文三三一頁
- 石原進・丸山竜平（一九八四）前掲書一三九頁
- 段熙麟（一九八一）『日本に残る古代朝鮮』（近畿編）創元社 大阪、三二八～三二九頁
- 吳洪哲（一九九〇）불교의 환경 인식과 이용, 화루, 우리출판사, 서울 一一八～一二二頁
- 久野 健（一九七五）『日本の石佛』二〇選、藝術新潮、東京、二六頁
- 李箕永（一九七三）『七、八世紀に日本の佛国土思想山岳崇拜の四方佛』『宗教史研究』第二輯、서울、三二頁
- 田村圓澄（一九八〇）『古代朝鮮佛教と日本佛教』、吉川弘文館、東京、一四二頁

- 文明大(一九六八)『韓国石窟院の研究』『歴史学報』第三八輯서울, 九九頁
- 大野達之助(一九六三)『佛教の伝来と三韓との関係』『韓来文化の後栄』(下) 金正柱編 韓国資料研究所、東京、五七頁
- 久野 健(一九八三)『佛像風記』日本放送出版協會、東京、九九―一〇四頁
- 松原三郎(一九七一)『新羅石佛の系譜―特に新発見の軍威石窟三尊佛中心として』『美術研究』二五〇号、東京、一九一頁
- 金元龍(一九六一)『韓国佛像の様式変遷』(下)『思想界』서울, 二七八―二七九頁
- 金元龍(一九六一)『韓国古の美学』『世界』一九六〇五月号、서울, 二八七頁
- 松原三郎(一九六九)『三国時代彫刻様式の時代区分に就いて―特に金銅佛を中心にして』金載元博士、『回甲論叢』、乙酉文化社、서울, 一〇〇八頁
- 松原三郎(一九七二)『新羅石佛の系譜―特に新発見の軍威石窟三尊佛を中心として』『美術研究』二五〇号 東京、一九二頁
- 鎌田茂雄(一九八九)『韓国の佛教思想』、学生社、東京、一三〇頁
- 松原三郎(一九六九)前掲論文一〇〇八頁
- 李殷昌(一九六九)『瑞山龍賢里出土百濟金銅如来立像考―造成様式の諸問題を中心として』『百濟文化』、第三輯、公州師範大学附設、百濟文化研究所、公州、三四―三五頁
- 黃壽永(一九六八)『忠南泰安磨崖三尊佛像補』『考古美術』第九卷通卷九八号、韓国美術史学会、서울, 四四三頁
- 文明大(一九六八)『韓国石窟寺院の研究』『歴史学報』第三八輯、서울, 九九―一〇〇頁
- 黃壽永(一九五五)『瑞山磨崖三尊佛像에 대하여』『震檀学報』第二〇号、震檀学会、서울, 三七三頁
- 權又根(一九八八)『古代日本文化と朝鮮渡来人』、雄山閣、東京、一〇四―一〇五頁
- 掘池春峰(一九七三)『華嚴經講説よりみたる良弁と審祥』、『南都佛教』三十一号、一一三頁
- 齊藤 孝(一九七三)前掲論文三三三―三三三頁
- 鎌田茂雄(一九八九)『韓国の佛教思想』、学生社、東京、一六〇―一六一頁
- 權又根(一九八八)前掲書 一〇三―一〇四頁
- 七八七年頃まゝとめられ、八二二年頃成立したといわれる佛教説話集
- 田村圓澄(一九八〇)前掲書 二八頁
- 齊藤 孝(一九七三)前掲論文 三二五頁
- 尹京烈(一九八八)『신라의 아름다운, 부처님 마흔, 慶州、一二二―一二三頁
- 清水俊明(一九八四)『石造美術』、『奈良県史(第七卷石造美術)』名著出版、東京、七二頁
- 齊藤 孝(一九七三)前掲論文 三三三―三三四頁
- 齊藤 孝(一九七三)前掲論文 三二七頁
- 井上秀雄(一九六九)『セミナルル…日朝關係史』、櫻楓社、東京、八八―八九頁
- 金理那(一九七五)『慶州掘佛寺の四面石佛에 대해서』『震檀学報』、第三九号四月号、서울, 六二頁
- 金達壽(一九七二)『日本の中の朝鮮文化』(近江、大和)三、講談社、東京、一一八頁、一三〇―一三二頁
- Chung-Myun Lee (1989) op.cit. 一六頁
- 谷川健一・金達壽(一九八八)前掲書八九―九〇頁
- 權又根(一九八八)前掲書一〇三頁
- 田村圓澄(一九八八)前掲書一八二―一八五頁、一九四頁
- 李基白(一九六七)『新国史新論』、一潮閣、서울, 一〇四―一〇五頁

- 田村圓澄（一九八〇）『前掲書二〇一〜二〇三頁』
- 金達壽（一九八八）『古代朝鮮と日本文化』、講談社、東京、一五八〜一五九頁
- 田村圓澄（一九七九）『東大寺大佛と渡来人』『季刊三千里』19号三千里社、東京、四四〜四五頁
- 田村圓澄（一九八九）『佛教の道』、学生社、東京、四二頁
- 上田正昭・村井康彦（一九八二）『佛教の伝来とその背景』『古代日本と佛教の伝来』、雄山閣、東京、三四〜三五頁
- 田村圓澄（一九八〇）『前掲書』、東京、二一六頁
- 洪孟坤（一九七六）『慶州南山七佛庵磨崖佛像研究』『弘益大学碩士論文』、서울、五頁
- 山名伸生（一九八五）『狛坂磨崖佛と南山磨崖佛』『栗東の石造品』五、『栗東の文化』、二頁
- 田中日佐夫（一九七六）『前掲論文五二八〜五二九頁』
- 齊藤 孝（一九七三）『前掲論文三二八頁』
- 文明大（一九八六）『韓国佛教美術의 源流 간다를 가다』、『韓国日報』（一九八六年一月二日）
- 大野達之助（一九六三）『前掲論文、五七〜五八頁』
- 田村圓澄（一九八〇）『前掲書二一四〜二一五頁』
- 石原進・丸山竜平（一九八四）『前掲書二二八〜二二九頁』
- 田村圓澄（一九八〇）『前掲書一四二頁』
- 井上秀雄・上田正昭（一九六九）『日本と朝鮮の二千年』、泰平出版社、東京、六一〜一三六頁
- 大野達之助（一九六三）『前掲論文五七〜五八頁』
- 黃壽永（一九五五）『瑞山磨崖三尊佛像에 대해서』、『震檀學報』第二〇号、三七三頁
- 洪孟坤（一九七六）『前掲書五頁』
- 滋賀県栗太郡役所が編纂したもの
- 堀井三共（一九三二）『狛坂寺磨崖佛踏査記』『東洋美術』一六号、京都、四二頁
- 宇野茂樹（一九七四）『近江路の彫刻』、雄山閣、東京、参照
- 齊藤 孝（一九七三）『前掲論文三一九頁』
- 川勝政太郎『日本の石佛の性格』―特に材質と彫成手法を中心として―『佛教藝術』三二号参照
- 谷口鉄雄（一九五八）『日本の石佛』、朝日新聞社参照
- 川勝政太郎（一九四三）『日本の石佛』、晃文社参照
- 齊藤 孝（一九七三）『前掲論文三一九頁』
- 太田古朴・辰巳旭・細川政之助（一九六九）『近江国金勝山狛坂寺跡奈良時代大磨崖佛文六弥勒說法請佛聽聞浮彫像 綜藝舎、京都、石佛一、二、三合本号参照』
- 田中日佐夫（一九七六）『前掲論文五三一頁』
- 齊藤 孝（一九七三）『前掲論文三三二〜三三三頁』
- 田中日佐夫（一九七六）『前掲論文五二八〜五二九頁』
- 林 博通（一九八二）『石山寺に蔵する古瓦譜およびその瓦について』『考古学雑誌』第六七卷四号、東京、四八〜六二、五一三〜五一六頁
- 丸山竜平（一九七二）『近江石部の基礎的研究』―近江、大和の石棺とその石工集団―『立命館文字』六、京都、五二五〜五二九頁

- 石原進・丸山竜平（一九八四）『前掲書九四～九七頁』
- 55 久野 健（一九八八）『古代の渡来佛』、『古代日本と渡来文化』、韓国文化院監修、学生社、東京、一八〇頁
- 田中日佐夫（一九七六）『前掲論文五三二頁』
- 56 金元龍（一九六一）『韓国佛像の様式変遷』（上）、『思想界』、서울、三二二頁
- 57 金元龍（一九六一）『前掲論文三二三頁』
- 洪孟坤（一九七六）『前掲論文二頁』
- 58 松原三郎（一九七一）『新羅石佛の系譜』―特に新発見の軍威石窟三尊佛を中心として―『美術研究』、東京一八〇頁
- 朝鮮総督府（一九四〇）『慶州南山の佛蹟』、서울、七六～七九頁
- 中吉 功（一九七三）『新羅・高麗の佛像』、二玄社、東京、一〇六頁
- 金理那（一九七五）『慶州掘佛寺の四面佛에 대해서』『震檀学报』 第三九号四月号、六〇～六二頁
- 文明大（一九七四）『新羅法相宗（瑜珈宗）の成立問題와 그美術―甘山寺弥勒菩薩受阿弥陀佛像과 銘心을 中心으로』『歴史学报』第六二、六三輯（一九七四年）서울、一五〇頁
- 松原三郎（一九七一）『新羅石佛の系譜』―特に新発見の軍威石窟三尊佛を中心として―『美術研究』二五〇号、東京、一八二頁
- Kim Chewon and Lena Kim Lee (1974), Arts of Korea, Kodansha International Inc, 東京、六八頁
- 59 洪孟坤（一九七六）『前掲論文一九～二二頁』
- 60 久野 健（一九八八）『前掲書一九六～一九七頁』
- 齊藤 孝（一九七三）『前掲論文三二三頁』
- 61 松原三郎（一九七一）『前掲論文一八九頁』
- 松原三郎（一九七一）『前掲論文一〇一八頁』
- 62 金元龍（一九六一）『前掲論文二八三頁』
- 洪孟坤（一九七六）『前掲論文三二頁』
- 63 松原三郎（一九七一）『前掲論文一七七頁』
- 金元龍（一九六一）『前掲論文三二三頁』
- 64 松原三郎（一九七一）『前掲論文一八七頁』
- 65 金理那（一九七五）『慶州掘佛寺址의 四面佛에 대하여』『震檀学报』第三九号四月号、五二頁
- 66 松原三郎（一九七一）『前掲論文一八七頁』
- 67 洪孟坤（一九七六）『前掲論文六頁』
- 68 松原三郎（一九七一）『前掲論文一八六～一八九頁』
- 69 尹京烈（一九七九）『慶州南山古蹟巡禮』、慶州市、一一三～一二六頁
- 『世界美術全集』（一九六〇）一九、印度、角川書店、東京、二〇一～二〇五頁
- 70 洪孟坤（一九七六）『前掲論文二三頁』
- 71 禹貞相・金燁泰（一九七〇）『韓国佛教史』、進修堂、서울、七〇頁
- 72 洪孟坤（一九七六）『前掲書二二頁』
- 金理那（一九七五）『前掲論文六二頁』
- 73 金達壽（一九八四）『日本の朝鮮文化』八、講談社、東京、二四七～二四八頁
- 久野 健（一九八八）『前掲書一八〇頁』

- 段熙麟（一九八六）『渡来人の遺跡を歩く』②山陽篇、六興出版、東京、二二四～二二五頁
- 大分県高等学校教育研究會社會部會（一九八七）『大分県の歴史散歩』、小山出版社、東京、一九五～一九七頁
- 宋亨燮（一九八五）『日本寺の百済文化』、『大田日報』、大田、一九八五年九月一四日
- 金達壽（一九八四）『日本の中の朝鮮文化』（十）講談社、東京、二一四～二一五頁
- 久野 健（一九八三）『佛像風土記』、日本放送出版協會、東京、三九～四〇頁
- 齊藤 孝（一九七三）前掲論文三三四～三三五頁
- 後藤正二（一九七八）石工「臼杵石佛地域の民俗」大分県臼杵市教育委員會として浜田耕作の『豊後の磨崖佛研究』参照

A Study of Bas-relief Buddhas at the Ruins of Komasaka Temple With Reference to Korean Migration in Ancient Japan

Chung-Myun Lee
Department of Geography
University of Utah
Salt Lake City, Utah 84112, USA

A careful study the historical background and the engraving period of the bas-relief Buddhas at the ruins of Komasaka temple (Komasaka Magaibutsu) sited on Konze mountain at Kurimoto in Shiga prefecture in Japan is not only essential to understand the influences of Korean Buddhist culture to the Japanese buddhist culture in the ancient period in Japan, it is also important to clarify the history of sculpture in China, Korea and Japan during the three kingdom period of Korea.

Through an investigation of the bas-relief Buddhas of Tae'an (Tae'an Maebul) located on Beckwha mountain in Tae'an eup, and the bas-relief Buddhas of Seohsan (Seohsan Maebul) situated at Yong-hyunri, Woonsan myun in Seosan-gun, it can be shown the Seohsan region became a birth place for carving the bas-relief Buddhas, and this region also played a significant role in Buddhist art during Paekche period. The bas-relief Buddhas engraved around the 6th century were much influenced by China during the period of Yuck-jo, end of Su, and the beginning of Tang dynasty. Later the skills of engraving bas-relief Buddhas in Seohsan region during the Paekche period spread to Namsan in Kyungju, and all over Korea. Finally it came into Japan. In comparing the bas-relief sculptures in Tae'an, Seohsan in the Seohsan peninsula, and Namsan in Kyngju in Korea as well as the ruins of Komasaka temple in Japan, we can clearly see the diffusion of the technique for the engraving of these Buddhas coming from China to Korea and into Japan.

Today, there are bas-relief Buddhas at the ruins of Komasaka temple in Shiga prefecture, Japan. It is marked as one of the fine works of sculptural art in terms of stone Buddhas in Japan. The establishment of bas-relief Buddhas was closely associated with the construction and development of the Todai temple in Nara. The religious site selection, and engraving method of bas-relief Buddhas at the ruins of Komasaka

temple are well correlated with the bas-relief Buddhas of Chilbulam (Chilbulam Maebul) located in the valley of Namsan Kyungju in Korea. Based upon a careful examination of hand gestures, postures, dress, and style of sculpture between the two Buddha triads, the engraving period of Buddhas at ruins of Kumasaka temple is presumed to be made around the beginning of the 8th century to the middle of the 8th century.

It is said that bas-relief Buddhas at the ruins of Komasaka temple were engraved by stonecutters of Shilla. However, if we thoughtfully consider another angle we may assume that it was engraved by the descendants of Paekche migrants who moved into the Afumi region during the three kingdom period. Migrants from Paekche also built the triple layer granite tower at the ishito temple in Kamou-gun at Aufmi. During the three kingdom period, Paekche learned these skills from China, and engraved the bas-relief Buddhas. They also bestowed a significant impact on the Buddhist culture of Japan during the United Shilla dynasty.

It is desirable to pursue intensive research on the bas-relief Buddhas in Yamaguchi, Oita prefectures and bas-relief Buddhas at the ruins of Komasaka temple in Shiga as well as other areas in Japan to clarify the picture of Korean migration into ancient Japan.